

## テセウスとアテナイ

— ミュケナイ末期管見 —

である。したがって、本稿は、やや明らかな点を求めながらの管見に過ぎない。

筆者は、なまに、諸家の研究に依拠しつつ、Mykenai 文明の崩壊がドリス人によるものではなく、彼らの侵入以前にギリシアを通過した移動民族の手によると推定する説に賛意を表した。<sup>①</sup> こんにちのところ、いまだ状況証拠にもとづくものではあるが、移動民族説が一層有力になりつつある。ところで、以前の小論では、Mykenai 時代の Athenai について触れること極めて少なかった。そこで本稿では、この時代末期の Attika の状況と伝説にいう Thesens の事績について、いさなか考えてみたい。いうまでもなく、Mykenai 時代の Attika の全体像を明確にすることは困難

## 新村 祐一郎

Mykenai 世界の崩壊によってエーゲ文明は終りを告げる。それとともに、線文字Bも失なわれ、忘れ去られて、ふたたび無文字の状態にもどる。移動民族の通過とドリス人を含む西方言群の侵入があいつぎ、ギリシアは混乱状態におちいり、一時、文化的に低迷するが、このいわゆる暗黒時代に至るまでの Attika の状況を直接明らかにする文献史料は存在しない。したがって、ここでは、多少とも関連のある史料を用いて、Mykenai 時代の Attika 像を垣間見るとともに、英雄 Thesens について考えたい。

Athenai の人々は、自身 autochthones であることを誇

りとしていたが、事實は文字通りの「土地生え抜き」ではなく、二二〇〇乃至二〇〇〇年「以下年代はすべて「紀元前」であるが、「前」または「B.C.」の標記を略す」にギリシアに侵入したインド・ヨーロッパ語族の一派(すなわちギリシア人)で、その中でも東方言群に属しており、彼らが先住民族を征服して支配するに至ったのである。Athenaiの地に集落ができたのは、四〇〇〇年紀とされているから、東方言群の侵入にともなう、この集落も彼らの支配下にはいったものと考えられる。それでは、AtikaがAthenaiを中心とする王国ともいふべき形をなしたのは何時頃であらうか。

二六四乃至二六三年に成立した Marmor Parium<sup>⑤</sup>によると、Athenai 初代の王として Kekrops の名をあげ、彼に因んでその地が Kekropia と呼ばれるようになったことを述べ、「Kekrops の時代から一三一八年」といっているので、その年代は一五八一／八〇年ということになる。いふまでもなく、Kekrops は全く伝説的な人物であるが、初代の王の治世を一六世紀初期にしているのは、Athenai を中心とする王国が成立する大凡の年代を示すものではないであらうか。また、Herodotos (VIII. 44) によると、Athenai 人は古くは Kranai と呼ばれたが、Kekrops 王の時代には Kekropidai と呼ばれ、Erechtheus 王の時代

には Athenaioi と呼ばれ、Ion が Athnai の stratarches となった時からは Iones と呼ばれるようになったといふ。したがって、Kekrops に因んだ部族名、地名が存在したことはほぼ間違いない。

Athenai 王国が成立した頃、ヘロポネソス半島にも Mykenai, Pylos, Lakedaimon など歴史的にも有名な諸国がすでに成立していたであらうが、ここに Mykenai は Kreta との貿易が盛であったようであるから、この利益が国家を一層発展させる経済的基盤となり得ていた筈である。当時の経済活動の中心は王宮で、農業・牧畜の余剰生産物も王宮に集積されており、その一部が貿易に利用されていた。このようにして、王宮には次第に富が蓄積され、財宝を保有するようになると、これをめぐる相互間の戦争・略奪が盛となり、一四五〇年以前とされるギリシア本土の勢力 (Mykenai 中心か) の Kreta 島 Knossos の征服も、なかば伝説的な Iion 征服(いわゆるトロイア戦争)も事實であるならば、同じように富(財宝)をめぐるものであったと推定される。

## 二

先に触れた如く、Mykenai 時代の Athenai 王国のあり

方を直接示す史料は存在しないが、線文字Bの記録文書が比較的多く残った Pylos 王国については、ある程度知ることが出来る。Athenai や Mykenai の王国が、当時、Pylos と全く同じ体制であったとは断言できないが、類似の体制をとっていたことも十分考えられるので、Athenai の状況を知る手がかりとして、一応、Pylos の政治体制に限って概観しておく。<sup>6)</sup> もっとも、Pylos の状況といっても、これは移動民族の侵入する直前の状況である。Pylos は移動民族の攻撃をうけて、一三世紀末までに焼け落ちたが、そこに残された粘土板は王室財産や徴税の記録であった。これらを通じて知られる政治組織は次のようなことのみである。支配階級としては、*wana-ka* (王) とこれを補佐する *ra-wa-ke-ta*, 軍事面を担当するかと思われる *e-ge-ta* などが知られる。また、王国領内には、いくつかの従属都市があつて、その支配者は *pa-si-re-e* と呼ばれ、そのすぐ下に *ko-re-te-re* というものがあつて、これらの都市には、*pa-si-re-e* の主宰する *ke-ro-si-ja* (長老会) があつたことも確認されている。さらに、王が直接支配する重要な村落には、王によって任命された *ko-re-te* とその補佐役の *po-ro-ko-re-te* が配置されていた。以上のような支配階級の存在は明らかであるが、それ以外のことは不明である。そのほか、

主要産業が牧畜と農業であつたこと、王宮には極めて専門化した職人奴隷が多数存在したこと、王国の財政がかなり複雑な手続きにもとづいて運営されていたことなどが明らかになつてゐる。しかし、この粘土板の記録は政治組織について、これ以上のことは明らかにしておらず、いろいろ推論は行なわれているが、確言できることは少ない。ただ、Pylos 王国で見る限り、*wana-ka* と *pa-si-re-e* との権限が明確ではないが、*pa-si-re-e* は *ke-ro-si-ja* を召集し得る点から考えて、*wana-ka* に従属してはいても、平時は半独立的な立場にあつたのではないかと推察される。したがつて、*wana-ka* の全国的支配は実現されていなかったといひ得るのではあるまいか。

以上の Pylos 文書は、文字通り、Mykenai 時代末期に書かれた記録であり、それだけに貴重なものであるが、この時期は、いっぽう、八世紀の詩人 Homeros 作とされる英雄叙事詩の時代的背景になつてゐる。この叙事詩はいうまでもなく文学作品であり、したがつて、ある程度の虚構が含まれてゐることを念頭におかなければならないが、しかし、すべてを虚構と片づけてしまふわけにも行かない。彼の叙事詩のうち、とくに“*Ilias*”はいわゆるトロイア戦争を叙したもので、ここでは数多くの英雄 (heroes) が登

場して活躍するが、この英雄のうち若干の者は広い支配地を持っており、その点から、これは当時の王の姿であらうと推察されている。その立場から叙事詩を読んだ場合、Mykenai時代の姿がある程度知られる。“Ilias”の第二巻四九四行以下に、通常、「船のカタログ」と呼ばれる部分があるが、ここでは各地域毎に指揮する英雄の名とその領域があげられている。それによると、たとえば、Mykenaiの英雄 Agamemnon は Mykenai をはじめ、Korinthos, Kleonai など合計一二の地域を率い、Lakedaimonの英雄 Menelaos は Lakedaimon, Pharis, Spar-ta など合計一〇の地域を率い、Pylosの英雄 Nestor は Pylos, Kyparissai, Dorion など合計九の地域を率いるといったような記事が続いている。その中で Athenai については Menestheus に率いられたというだけであるが、Attika の諸地域を率い、たことは想像に難くない。この英雄というのを王とおきかえ、諸地域を従属都市とその領域と理解すれば、Pylos 文書に見える王と従属都市との関係に類似してくる。Pylos の場合、従属都市と云っても、実際は長老会などを持ったかなり独立性の強いものであったことが考えられるが、“Ilias”に出てくる諸地域といわれる都市も、同じような従属都市で、平常は半独立の

状態にあるが、戦時に限って王の指揮下におかれたのではないかと推察される。

ところで“Ilias”の中で、諸国と比較して、Athenai 王国がどの程度の力を保持していたかは、にわかに断定できないが、船の保有数は五〇隻となっている。諸国の中で船の数のもっとも大きいのは、Mykenai (Agamemnon) の一〇〇隻、ついで Pylos (Nestor) の九〇隻、Tiryus (Dionedes), Kreta (Idomeneus) の各八〇隻、Lakedaimon (Menelaos), Arkadia (Agapenor) の各六〇隻であり、五〇隻より多い Athenai のほか Boiotia があり、ちうど Achilles に率いられた諸地方の船が同数であったといえる<sup>①</sup>。

### 三

前記の Pylos 文書や Homeros の英雄叙事詩と対比すると時間的に大きな開きがあるが、五世紀後半の歴史家 Thukydides に引いて、はじめて、Mykenai 時代の Athenai についての記述が見られる。すなわち、第二巻一五章の中で、ほぼ次のように述べている。

……Kekrops はじめ初期の諸王の時代を経て Theseus の時代に至るまで、Attika はごくつかの polis に分かれており、各々が prytaneion と archon とを持ち、恐るべき事件がおこらない限り、王の下に集まって評議を開くこともなく、各 polis が自身を統治し、自身で評議會を開いていた。時には、たとえば Eumolpos に率いられた Eleusis の人々が Erechtheus に戦闘をしかけたように、王に反抗することもあった。しかし、Theseus が王になると、智勇兼備であったので、彼は国家秩序を再編し、これまでの各 bulentation と archon を廃止して、唯一の bulentation と prytaneion を設置し、現在の Athenai に統合した。住民にはこれまでのように自身の土地を有することを認めたが、この Athenai だけを唯一の polis として認めることを強制した。……

Theseus については、のちに触れるが、この記事の中に出てくる prytaneion とは本来ギリシアの各集落の中心にあつて、絶えることのない火（聖火）を保存する聖所であり、いわば宗教上の中心となる場所であるが、同時にそれが政治上の中心ともなった建物である。また、bulentation

は「會議室」の意であるが、事実上は有力者の集会する場所である。ちがひ、archon は「統治者」「首長」を意味するが、この場合は、各 polis の首長を指していることは間違いない。文中にある Eumolpos は Eleusis の archon であり、Erechtheus が basileus (王) にほかならぬ。これらのことを念頭において Thukydidēs のこの記事を読み直してみると、前半 (Theseus の即位以前) は Mykenai 時代の Attika 乃至 Athenai 王国の状況で、その体制はすでに垣間見た Pylos の体制に近うことが知られる。すなわち、このにいう basileus (王) が Pylos 文書に出てくる wa-na-ka に当り、archon が pa-si-re-e に当る。そして、polis と表現されているのが王国内の従属都市であつて、しかも、それは平時には半ば独立しており、王の全国に対する支配権が平時は名目的なものであることさえ示している。また、各 polis はそれぞれの有力者の集会によつて、その polis の方針を決定しているが、これが Pylos における ke-to-ai-ia に当るものである。ただ、ほかの王国でも、時には、王と従属都市の支配者の間で対立があつたか否かは明らかでない。

Thukydidēs の前記引用記事の後半は、要するに、Theseus の事績を述べたものであり、Attika 全土を polis

Athenai に統合したことを叙しているが、これは直ちに事実として受けられることではなからず、Attika の諸集落をまとめ、pyrtaneion を Athenai に統合する方式は一般的に Theusens の シュノイキスモス と呼ばれるが、Thukydidēs はこれを polis が成立する際に見られる諸集落 (demos) の統合と同一視している。しかし、この種の polis の成立は Mykenai 時代には考えられなからず、それ故、Bengtson は「伝承では Attika の国家的統一が神話的英雄 Theusens に帰されている」と述べたのも、「Attika の統合は Athenai のメタロポリスに住む支配層の指導の下に、メンガイア、テトラポリス、アクテを統合したもので、長期間の発展の結果である」と述べている。

## 四

Marmor Parium (20-23) にあるところ、Theusens は一二五八／五七七年にはすでに王位に上っており、一二五〇／四九一年にも王位にあったが、一二三〇年頃には別の王が即位している。したがって、Theusens はほぼ一二三世紀中頃の王といふことになる。この Theusens は一二三の polis を合同して民主政 (demokratia) の国家を作ったとある。民主政のことは、ほかにも Plutarchos (Theusens 四二四) にも

出てくるが、これは明らかに Athenai の民主政が著しく進展した五世紀頃に付加されたものに違ひない。この Theusens については、その伝説がいろいろな形で各方面に分かれており、その原像を捉えるのは極めて困難である。

三世紀以降の文献には、しばしば Athenai の王統が記載されている。伝承上、Athenai の王統には Kekrops とはじまる王統とそのあとを継いだ形となる Melanthis とはじまる王統とがあるが、Theusens は系譜上 Kekrops 王統に属している。Marmor Parium (1-26) にあるところ、初代の王として Kekrops が記され、以下順次 Kranaos, Amphiktyon, Erichthonios, Pandion, Erechtheus, Kekrops (II), Pasion (II), Aigeus, Theusens, Menestheus, Demophon と続く。この王統はその後の Kastor と Apollodoros にも同じような変更なく現れるので、すべての三世紀の前半には、伝承上の王統が確定していたものと思われる。

しかし、この王統もすべてが親から子へと世襲されているとは限らなからず。Apollodoros (III. 14, 5f) には Kekrops と Kranaos との関係が明確にならなからず、次の Amphiktyon と Kranaos を追って出てくる王位に上る Erichthonios と Amphiktyon を追放して王位に上る。また、

Pandion (II) は従兄弟連に連われし Megara に逃れし  
 る。ゆゑに Plutarchos (Theseus 卷一三) に於て、Ai-  
 gens は実父 Pandion (II) の養子たるが、Erechtheus と  
 の血縁關係がない、とどう伝承もあつた。

しかるに、五世紀の Herodotos や Thukydides には、  
 いまだ王統が確立してゐなかつたと思はしめる点が見られ  
 る。其れ Herodotos は Athenai の王として Kekrops,  
 Kranaos, Erechtheus, Aigeus, Theseus に言及するが、  
 彼のの事績についてはほとんど触れられていない。ただ  
 先に引用した如く (VIII, 44) Kekrops 王以前の時代には  
 Athenai の人々が Kranaoi と呼ばれてゐたといふが、の  
 ちに成立した王統は Kekrops の次に Kranaos なる王  
 名をあげている。Kranaoi は、当然 Kranaos に因んだ名  
 称であるから、この前後關係が逆になつてゐるやうに思  
 われる。いづれに、Thukydides には Kekrops, Pandion,  
 Erechtheus, Theseus が登場するが、Pandion (II, 29) 以  
 外は、いづれも Theseus の記事に関連してゐる。Thukyd-  
 ides は「Kekrops はじめ初期の諸王の時代を述べ……」  
 という表現で、言外に Kekrops が初代の王であることを  
 示しているが、Theseus が何代目に當るかはずしてあら  
 ず、いまだ王統の伝承が確定してゐなかつたことを思はし

める。

Herodotos は Thukydides に共通して言及されるのは  
 Kekrops, Theseus のみであるが、それと次第に Kranaos,  
 Pandion, Aigeus が加わり、これらそれぞれの伝承を持つ  
 人物を如何に合理的に配列すべきかが四世紀の歴史家や年  
 代記作者の課題となつたに違ひない。Kekrops を初代と  
 するものは既に確定的であつたらしいが、Erechtheus に  
 ついては Herodotos (VIII, 44) に於て、Kekrops 以来  
 Kekropidai と稱してゐた Athenai の人々の名称を Athe-  
 naioi (マナナイ人) と改めた、とあるが、Marmor Pa-  
 rium 10 に於て、同じことが Erichthonios の事績とつ  
 て語られてゐる。しかしながら、Erechtheus は Homeros  
 に於いては女神 Athena と關係深い英雄として出現してお  
 り (II, II, 547; Od. VII, 81) 彼の治世に Athenaioi と呼  
 ばれるやうになつたといふのも、この地名が女神名と不可  
 分の關係にあることから、極めて古くより、英雄として知  
 られた存在であつたと思われ。しかし、のちに成立した  
 王統の伝承では Erechtheus は Kekrops から六代目に位  
 置してゐる。Theseus の名は Homeros に見える (II, I,  
 265; Od. XI, 323 & 631)。彼は叙事詩の中づゝとくに、重要  
 な役割を演じてはゐないが、彼が Aigeus の子であること

また、Ariadne との関係にも言及されている。Kranos, Pandion の名は Homeros には登場しない。Erichthonios は Hellenikos (F Gr H 4 (Hellenikos) F. 39) に現れるから、五世紀には、すでに、メメントナイア祭の創始者として知られていた。彼は、しばしば、Erechtheus と同一視され、Marmor Parium では、メメントナイア祭の創始者であることが、Attika の住人を Athenaioi と名づけたことになっている。Pandion と同じ名は Athenai における Zeus Herkeios のメメントナイア祭と関係がありそうであるが、明確なことは明らかでない。

## 五

Athenai の王統の名をひらねつるものには Kekrops と Kranos の出自に同じく、Marmor Parium (14) では、この二つ、記されたことが、この二つ、Apollodoros (III. 14. 1-5) では、ともに大地から生れた、とし、ことに Kekrops は人間と蛇の混合した体であった、と述べている。また、Kranos は Deukalion の同時代人として、この二つ、この二つ、Marmor Parium を言及している。次に Amphiktyon は Marmor Parium (5) では Deukalion の子であるが、Apollodoros (III. 14. 6) は、それと

大地から生まれたとの説もあることを記している。四代目の Erichthonios は、本来、大蛇そのものであって、Athena によって育てられ、死後もその女神の領域に葬られたところ (Apollod. III. 14. 6-7)。先にも触れた通り、彼と Erechtheus とは、しばしば、混同されている。一方から他方が派生したとも考えられるが、いずれが本来的であったのかは、にわかに決し難い。また、Herodotos (VIII. 41) が言及している巨大な蛇は Erichthonios と解されることが多く、しかも、その蛇が Athena 女神と同一視されているところから考えると、Erichthonios の起源の古さも認めねなるべき。なぜ、Erichthonios は Erechtheus を共に農業にかかわる英雄が本来の姿であったと思われる。

以上のように Kekrops, Kranos, Amphiktyon, Erichthonios, Erechtheus は、いずれも大地と深くかわりがあり、農耕との結びつきが考えられるが、これと結びつき難いのは Pandion である。ただ、この Pandion は Erichthonios と Erechtheus とを結びつける役を果しており、その点においてのみ関係があると見える。七代目の Kekrops (II) には、いさなか人為的な匂いが強く、何らかの理由で挿入されたものではないかと思われる。この人物は

Marmor Parium によつて Apollodoros にも独自の伝承を持つてゐた。Pandion (II) は Metion の息子たゞに攻められた Athenai から Megara に難を避けた、と知られてゐるが、Aigeus は Pandion の Megara 亡命中に Megara の王女との間に生まれた子である。Pandion の死後、Aigeus とその兄弟達が、Metion 一族を Athenai から追つ、Aigeus が王位を継承したと伝えられる (Apollod. III. 15. 5-6)。しかし、別伝では、Aigeus は実父 Skyrios なるものの子であつたが、Pandion の養子となつたとされてゐる (Apollod. III. 15. 5; Plut. Theseus. 13)。

この二つ、とくに注意しなければならぬのは、Kekrops 以来 Pandion (II) に至るまでの諸王が、すべて、大地から生れた、乃至は、大地や農耕に深いかかわりを持つものであつたのに対して、Aigeus は余所者または余所者の要素を持つ人物であつたことである。すなわち、彼には Athenai の土地と結びつく要素が稀薄だったのである。それと同じことが、Aigeus の子である Theseus についてもいえる。土着を強調し、大地との結びつきを主張する諸王に対して、Aigeus と Theseus とは、むしろ、海との結びつきが強つ。Aigeus は海に身を投じて死に、その名から Aigalon (エーゲ海) の名称が与えられた、という伝承がある。

いふまでもなく、Theseus については、その生地は Troizen とされており、父は系譜の上からいへば Aigeus であるが、彼は、実は、Poseidon の子であるところの伝承がある (Plut. Theseus. 6)。また、彼は Krete にも赴いたと、Skyros 島で海へ落ちて死んだとわれ (Plut. Theseus. 35)、やはり海との結びつきが強つ、Athenai の土着びはなつ。Marmor Parium (23) によると、Theseus のあつて一三三〇〜二九九年に Menestheus が Athenai 王になつたとあり、その治世に Ilion の遠征が行なわれてゐる。この Menestheus は六代目の王 Erechtheus の曾孫となつてゐるが、王統とは別の系統である。このような系譜を見ると、Erechtheus のあと、その系統をひく一派の間で争いがあり、それが数代のうちにまで影響を与えていたように感じられる。しかしながら、これは傍系との王位継承の争いなどではなく、Aigeus を中心とする全く別の家系が有力になつてきたことを示し、伝承の上では、この家系が支配権を握つてから、系図が最終的に結びつけられたと見るべきであらう。

Aigeus, Theseus の系統が海と関係深なのは、当時の Athenai の状況を反映するものとして興味深い。すなわち、これは Athenai が純粋な農業国から Mykenai 中心の貿易圏に組みこまれ、交易をも行なう国へと転化して行く状

況を示すもので、貿易の隆盛とともに、これに携わるものが新興勢力として Athenai そのものの主導権を握るまでに成長したことを物語るものである。しかも、その新勢力が土着のものの子孫であることが確認されなければ、余所からの移入者と見なされても致しかたあるまい。Thesensの次にその子 Demphon ではなく、Menestheus が継承しているというのは旧勢力の巻き返しもあったことを指すのかもしれない。

Athenai の王統が確立する以前には、のちに王と称されたものたちもかつては英雄 (hēros) として知られる存在であつて、Thesens のことば “Ilias” (I. 265) においては「不死なる神にも比肩し得る人」とあり、文字通り、神的な人 (theios anēr) 英雄と見なされていたのである。先に述べた勢力関係の転換とは、Erechtheus など農業にかかわる英雄に対する崇拜と並んで、新興勢力が海にかかわりのある英雄に対する崇拜を盛り上げたということである。

## 六

しかし、いっぽう、Thesens が Athenai を強化し、Attika 全土を統一しようとしたものの Thukydidēs のいうところも、真実の面を含んでいる。一応 Thesens から離

れて、一二五〇年頃の Athenai の状況は如何であつたらうか。この時期は、まさに Illyria 地方からの民族移動の波がギリシア方面に及ぶ直前に当たっている。しかし、この異民族の侵入は突然おこつたのではなく、危険が迫っていることが事前に察知されており、ペロポネソスの方では、彼らの侵入を食い止めるべく、Isthmos 海峡に防壁を築くことが構想され、Mykenai, Tiryns, Athenai などでは城壁の強化その他の防備体制がとられている。その際、Mykenai, Pylos, Athenai などの諸王国が、先に見た如き国家体制であつたならば、この「恐るべき事件」に遭遇して、従属都市の首長などが王の下に結集したに違いない。たとえば Attika では、各 polis の archon が Athenai の basileus の実質的な支配下にはいるという戦時体制がとられた筈である。Illyria 方面の民族を中核とする移動民は中部ギリシアを通過して南部のペロポネソス半島にはいり、Mykenai, Tiryns, Pylos などは戦火によって大きな被害を蒙っている。Athenai も同じ時期に攻撃されている。考古学の成果にもとづくと、一二二五年頃 Athenai のアクロポリスの外側の家々が突然放棄されているが、これは外敵が侵入する危険性があつたので、城壁外の人々がアクロポリス内へ避難したことを示している。もっとも

Athenai はこの時侵入民を撃退している。

と云うで、Theseus が Attika に秩序を与えたとか、あるいは、すべてを Athenai に統合した、というのはい、この非常事態に対処するための一時的な basileus による全国支配体制の成立を意味するものと解すべきであろう。このような体制は当時の王と支配層の協力によって形成されたに違いないが、それが、丁度、英雄 Theseus の崇拜が高まっていた時期であったので、のちに特に英雄 Theseus の事績として語られ、伝説的な王統の形成とともに、Theseus を全国支配を達成した偉大な王と表現するようになったものと思われる。しかし、現実には、これは飽くまで一時的な体制であった。いわゆる Theseus のシュノイキスモスキの実体は、移動侵入民族に対抗するためにとられた一時的な独裁的体制に過ぎなかった。この時の王権強化が恒常的なものでなかったことは、そののちの歴史が示す通りである。

註

- ① 拙稿「ミケケナイ文明の崩壊」『大手前女大文学論集』第二十号、一九七六年、一七一—一八四頁
- ② P. Mackendrick, *The Greek Stones Speak: The Story of Archaeology in Greek Lands*, 2nd Edition, 1981, p. 129.

③ 「Paros 大理石碑文」(F. Gr. H. 239)

④ この碑文が作成されたヘレニズム時代には、以前に書かれた歴史、伝承、年代記などが集められ、その内容が整理されて、年代等が、やや、人為的に定められた場合があるから、その碑文の中に記された年代の古い部分はそのまま事実として受けられることはできない。

⑤ M. I. Finley, *Early Greece: The Bronze and Archaic Ages*, New & Revised Edition, 1981, pp. 43 & 44.

⑥ Pylos については、我が国において、太田秀通「ミケケネ社会崩壊期の研究」(一九六八年)に詳細に論じられ、同「エーゲ文明とホメロスの世界」(岩波講座『世界歴史』一所収、一九六九年)その他にも、いささか簡略な説明がある。以下これらを参考とした関係箇所のみを概観である。

⑦ 他の約二〇箇国の船数は四〇隻以下で中でも少ないところは一〇隻に満たない。

⑧ H. Bengtson, *Griechische Geschichte von den Anfängen bis in die Römische Kaiserzeit*, Sonderausgabe 4. Aufl., 1976, S. 60.

⑨ Kistor のタロノミーテ Eratosthenes (276/72-194 B. C.) のそばに基へ (cf. J. Forsdyke, *Greek before Homer: Ancient Chronology and Mythology*, 1956, pp. 29-30)。  
 など Eusebios の *Chronicon* の *Athenai* の王統について Kistor を参照しよう。

⑩ J. J. “Bibliothekar” の著者は「ヘテナイ人で文法家」と称

- される二世紀の人物とは別人であると説が有力であり、この作品は紀元後一世紀の作と見なされている。詳細は *Loeb Classical Library* に収めたる “Apollodorus” I (1921) の J. G. Frazer の Introduction 参照。
- ⑭ この名は明らかな chthon (大地) に由来して、大地から生れたものの伝承を持つ (cf. M. P. Nilsson, *Geschichte der griechischen Religion*, I, Bd. 2, Aufl. 1955, S. 317.)
- ⑮ 原随園「テセウス伝説考」『ギリシマ史研究第三』一九四四年一一一〇頁所載)六二頁。
- ⑯ 原、前掲書六四頁には、Erechtheus の方が本来的として、*trous* が、必ずしも然りとはいえなから面がある。高津春繁『ギリシマ・ローマ神話辞典』(一九六〇年)の「ハリットニキス」「ヘンタテウス」の各項参照。
- ⑰ W. W. How and J. Wells, *A Commentary on Herodotos*, Vol. II, 1928, p. 247.
- ⑱ L. R. Farnell, *The Cults of the Greek States*, Vol. IV, 1907, pp. 50-51.
- ⑲ Mackendrick, op. cit., p. 135. ㊦ Mykenai 時代の *Athene* の名は、一三二〇年から一二四〇〜三〇年の時期が a period of overseas commercial expansion である。
- ⑳ 及する。
- ㉑ 六世紀末の Kleisthenes の改革の結果生まれた新部族の名祖を一〇〇の祖先の中から選んだ。Aristoteles (Athenation Politika, XXI, 6) を採る。この部族は、Erechtheis, Aigeis, Pandionis, Kekropis など。Theseus の名は、困窮の地を Akamantis 王族の Akamas の名に因むるに由来する。その名は「祖先」(archagetai) という語が使用されるが、実質的では古く英雄を描くところの英雄を指す。J. M. Moore の *Myth* (Aristotle and Xenophon: on Democracy and Oligarchy, 1975) は、この語を heroes に訳している。
- ㉒ F. H. Stubbings, *The Recession of Mycenaean Civilization*, (CAH Vol. II, Part 2, 1975, Chapter XXXVII, pp. 338-358) p. 352.
- ㉓ V. R. d'A. Desborough, *The end of Mycenaean Civilization and the Dark Age*, (CAH Vol. II, Part 2, 1975, Chapter XXXVI (A), pp. 658-677) p. 659.
- ㉔ Mackendrick, op. cit., p. 132. (本書教養 西洋史部)